

平成19年度第1回「立ち上がる農山漁村」有識者会議 議事録

○林座長 ただいまから平成19年度第1回「立ち上がる農山漁村」有識者会議を開催いたします。

本日はお忙しい中、福田総理大臣に御出席いただいております。それでは、福田総理大臣から御挨拶をお願いいたします。

○福田総理大臣 それでは、一言御挨拶させていただきます。

本日は有識者の皆様、御多忙のところ本当にありがとうございます。また遠くのほうから農業、それから漁業、林業といろいろな分野でご活躍の皆様方に、本当に遠くのほうからお集まりいただきまして、本当に遠くなんですよね、きょうお集まりの方は。ありがとうございました。

この「立ち上がる農山漁村」というこの有識者会議も、頑張る地域の取組を積極的に支援するというそういう趣旨でございまして、そういう取組を創意工夫によっていろいろと発想して、そしていろいろな観点から、1つの点とかそういうことではないですよ。全国に広げていくといったような、そういうような面的な展開を図っていきたいというような趣旨でございまして、今日は各地域で実際に活性化に取り組んでおられる方々の生の声を伺うと、こういう趣旨でございまして。

今後、地方再生支援の参考となるような、実りのある議論を是非期待をさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。政府のほうもいろいろと取り組みしておるところでございまして、そういうふうなことについてもまた御理解いただいて、また御協力もお願いしたいと、こんなふうに思っております。どうぞよろしくをお願いいたします。

○林座長 ありがとうございます。それでは、プレスの方々が退席されますので、しばらくお待ちいただけますでしょうか。

(プレス退室)

○林座長 それでは、議事を進めさせていただきます。

「立ち上がる農山漁村」の趣旨につきましては、ただいまも福田総理大臣が御説明になりましたので、省略いたします。全国のモデルになるような取組を推進するという大きな目標にしております。

そこで本日は、各地域の活性化事例で実際に携わられた方々、特に舵取り役や取りまとめ役の方々をお招きして、創意工夫や人材育成、ネットワークづくりなどのポイントについて意見交換を行うとともに、平成19年度「立ち上がる農山漁村」及びそれらの事例に協力して地域の活性化に貢献した企業、大学を、「立ち上がる農山漁村～新たな力」という形で選定したいと思います。

まず、意見交換に入る前に、諸般の事情により退任された、非常に残念でしたが、丹羽宇一郎委員、それから長岡杏子委員に代わりまして、残念ながら本日はいらっしゃれなかったんですが、アサヒビール株式会社池田弘一代表取締役会長と、それから株式会社「宣伝会議」田中里沙取締役編集室長が新委員に就任されました。先ほど言いましたように、池田委員は所用のために欠席されますが、田中委員には出席していただいています。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、最初の議題として、各地域からお越しいただいた方々から、お手元に配付してある資料1に沿って、それぞれの取り組みについて説明をいただいた後、政府関係者、委員を交えて意見交換を行います。

申しわけありませんが、時間が非常に限られておりますので、お一人3分以内という時間でお願いいたします。

まず、ご自身もUターン者であり、外からの視点でユニークな商品開発に取り組まれております羽咋市1.5次産業という、1と2の間というんですか、その振興室の高野誠鮮総括主幹に、Uターン者が地域の活性化の推進役となったきっかけや、経験などについてお話しいただきたいと思います。

それでは、お願いします。

○高野（羽咋市1.5次産業振興室） 石川県からまいりました高野と申します。座ってご説明させていただきます。

左手の親指を曲げていただきますと、これは日本列島の能登半島です。第2関節のところからやってまいりました。海と山に囲まれて、9キロ四方の非常に小さな市です。人口は今2万4,000弱です。私たちが取り組んだところは、その羽咋市の中でも最も疲弊したところです。高齢化、離村率、十七、八年で人口が半分です。高齢化率が54%です。平成17年度から取り組みをさせていただきました。山の山村集落の活性化を、「山彦計画」と名づけて、漁村部を「海彦計画」と名づけて進めさせていただいております。

平成17年当初取り組み予算が60万円で、1年後に米をブランド化して出さないと、橋中市長から命じられたわけです。資源がないので、人に頼るわけにはいかない。コンサルタントに頼るわけにはいかない。試行錯誤であの手、この手、いろいろやりました。その地区は神子原と申します。神の子の原、これは英語で訳しますと、Son of God、つまりキリストを意味します。人は物を消費したり、食べたり、あこがれたりする。ロンギングといいますけれども、それはだれかが食べているから私も食べてみたいと消費者は思います。

そこで、ローマ法王がもし食べていたらどう思うかというところに着目しまして、バチカン大使館にすぐ電話をかけまして、英文で長々と手紙を書きまして、ローマ教皇様に召し上がっていくことはできないでしょうかというところで、ファックスを流させていただいたところ、お電話ありまして、そんな聖なる地名が日本の中に残っていたんですかと言って、大使並びに代理大使がぜひお目にかかりたいということになりまして、首長と村の

代表者と一緒に、大使館のほうへ参りまして、でき上がったお米が実はここに「能登神子 原米」といって、安土桃山時代から献上されたものをいろいろ調べさせていただきました。一番最初が織田信長の屏風と書いてありました。それ以降、お米がございません。つまり、ローマ法王に初めて献上された米になったわけです。

これを最大に活用して、そこら中に打って出たわけです。東京のデパートにもこれを置いていただいたりするんですが、東京在住の方から「ローマ法王がお食べになったというお米を私も食べたい」というときになりましたら、まずお断りしました。消費者にデパートは弱いわけです。これをデパートに持ち込みますと、実はデパート側で25%の粗利を取っていかれます。それで売り切れましたと。ひょっとしたらデパ地下にあるのではないのでしょうかと言ってお断りをしたわけです。そうすると、今度はデパートのバイヤーさんの方から連絡がありまして、お前たちのお米を我々のところでも扱いたいということで、値段はこちらの言い値です。輸送費、袋の印刷費等も全部持っていただきます。そして、農家が直接お米を売って、直接もうけるといって、実は流通ルートすべてを変えていったわけです。

お米の値段、1.5次と実は名前をつけましたのは、農業には自分でつくったものに自分で値段をつけることができないという実は最大の欠陥があるんです。市場が全部つけてしまいます。それに左右されずに、ただし、値段をつける以上は、農家が全責任を負うというやり方で実はやってまいりました。ただ、取り組みに当たっては猛反対、当然ございました。売れなかった場合には、役所が全部お米を買い取ってくれるのかということもございました。1年の間に約40回以上、足を山の村のほうに運びまして、協議をして説得をし、そして少しずつ徐々に徐々に、ローマ法王に献上した途端にいろいろなカトリック新聞に書かれまして、問い合わせが殺到し、数カ月で700俵の米が出てしまう。売れないという不安を持っていた農家が、いきなりお米の値段が3倍近くになりました。コシヒカリが1万4,000円ちょっとだったところに、4万2,000円になりました。それでもうかるとわかった途端に、農家の態度が急に、皆さんの態度が変わったんですね。やればできるんだと。従来農協や大市場に出すのではなくて、個別に売っていきこうということで、今年の7月、直売場ですが、農家の方々が集まった株式会社をつくっていただいて、自営をさせていただいています。一番の稼ぎ頭が八十数歳になるおばあちゃんですが、月額売上39万円たたき出しました。私は年金よりも大きくなったと言って大喜びされています。

その派生商品と申しますか、そのお米でつくったお酒も一緒にローマ法王に献上させていただきました。これを発表したのは、この東京にございます電気ビルにございます外国人記者クラブで、石川県内でこれは一切発表しませんでした。16カ国の外国人記者に集まっていただいて、これを飲んでいただきました。日本人は、日本人がつくった物に過小評価します。そうではなくて、外国人がすばらしいと言え、必ず日本人はああそうなのかと目を向けるんですね。お米に対してもそうです。山の米は工場廃水や生活廃水が入っておりませんので、非常においしいお米です。そのお米を質によって実は値段を決め

るべきであって、量によって値段を決めるべきではないと考えたわけです。それが私たちのものの考え方なんです。

○林座長 そろそろ。30分になりそうなので。

○高野（羽咋市1.5次産業振興室） あらゆる手、手段を尽くしています。人工衛星を使って米を選別したりもやっていますし、大学生が毎年村に入って、3月3日のひな人形づくりを棚田のほうでやったりして、交流と、そして農産物の付加価値をつけるということを今でもやっております。

簡単でございますが。

○林座長 ありがとうございます。

それでは続きまして、本日一番遠いところからいらした、沖縄ですね。御自身は移り住まれた地域でありますけれども、その資源の活用に取り組まれております「笑味の店」の金城笑子代表に、地元の食材や人材に着目したきっかけや取組が広がった要因と工夫などについてお話しいただきます。

○金城（笑味の店） 沖縄本島大宜味村から参りました金城です。よろしくお願い致します。

お手元にホームページの資料がつづられたのがあります。それで店の動きが伝わっていくかなと思っています。そして、あとこのお料理のレシピ集があります。これは5年前に沖縄タイムズの1年間の連載で、伝統料理を紹介したメニューが紹介されています。あと、小さいパンフレット、これはこの今、前にあります商品を、おばあの畑からやってきたという見出しで、それらの使い方も含めた紹介パンフレットになっています。その資料をごらんをいただきながら、3分間という限られた時間ですので、読み上げてポイント紹介にかえさせていただきます。

すみませんけれども、この製品を回していただけますでしょうか。お願いします。

結婚を機に、地元に移住して出会ったのは、82歳にして24本の歯を残しているおばあ。サヤインゲンを育てて、出荷している94歳のおばあ。100歳を超えても、畑仕事に生きる喜びを見出しているおばあ。そんな長寿者たちの家の周りには、台所と隣り合わせの小さな畑がありました。そこには、昔々から健康とかかわりながら使い継がれてきた医食同源の伝統野菜、きょうのその製品に使われているウコン、サクナ、ウイキョウ、ハンダマ、インガナなど、なぜか控え目に育てました。それらの野菜は、市場には売られていない。自分で育てなければ使えない。近くに育っていなければ不安になる。少しあれば安心。摘めばまた芽を出す。季節が来ると芽を出す。とても育てやすく効率がよい。なので、私はだれにでもつつい「つくらなければ損、損。」と口癖になっていました。

そのかたわらで、そのままではおばあの代で消えてしまいそう。工夫して料理しなければ。普及させなければ。その強い思いが「笑味の店」のオープンに至ったのです。おばあの野菜を詰めた「長寿膳」は、今や全国、海外からのツアーのお客様、取材の対応に追われています。雑草みたい。長生きできそう。家に帰ったらつくってみよう。反応はさまざま

までです。長寿者との触れ合いは、まるで有名人を目にしたかのように、体に触れ、握手を求める。健康に老いるおばあちのすばらしさをさらに多くの人に伝えたいと思うのです。

何よりもうれしかったのは、「私らがお金を払ってまで食べない野菜を、だれがお金を払って食べてくれるかね。」オープン当初に言っていたおばあち自身が、やはり昔から食べてきたものが体によかったんだねと言うようになったことです。理解が深まり、素材もふえた。今がチャンスと、生涯現役を後押しする「畑のシリーズ」、方言で「ふある」というんですけれども、「ふあるシリーズ」の商品の販売をスタートさせるときだと思いました。地元でいただく料理から、食卓で生かす調味料へと発信、この商品が動くことによって、決して広くない小さな村の休耕地が活性化し、雇用にもつながります。そして、今までおばあちとかかわる中で、その元気の源が畑仕事にあると感じてきたからこそ、実現したい商品でもあります。

何よりも、その育て方、使い方を生活の中に取り入れ、実践してきた長寿者の知恵が、逆に商品を後押ししてくれるものだと思っています。育てている人、素材、製品、地域丸ごとブランドを目標にしています。その努力が家庭菜園レベルの小さな地産地消へ波及し、長寿の財産を次の世代につなげていければと願います。

ありがとうございました。

○林座長 ありがとうございました。

それでは、3番目になりますが、地域内部の人材を活用して、地域の活性化に取り組まれております錦町林業振興会女性部会の藤井キクエ会長に、枝や葉っぱなど、森林の未利用資源の活用に着目したきっかけ、あるいは女性の社会活動への参加促進などについて、お話しただければと思います。

どうぞよろしくお願いします。

○藤井（錦町林業振興会女性部会） 山口県から参りました錦町林業振興会の女性部会の藤井でございます。

私が暮らしております錦町は、山口県の東の端にありまして、岩国市の中でも北東部にある町で、中国山地の屋根に当たる標高1,000メートル内外の山々に囲まれた、林野率が91%の町です。

私たちの女性部会は、森林施業や育林技術を学ぶ林業教室の受講を契機に、昭和59年に18名で発足しました。会では山の厄介者であったつるを原材料として、昭和63年からつる細工に本格的に取り組むようになりました。そのきっかけは町有林の枝打ちや、間伐などの作業をする中で、つるが地下足袋にひっかかって転んだりすることがあり、この厄介者を何とかできないものかとずっと考えておりました。そんなとき、広島に住む嫁が、トウで帽子を編んでいるのを見て、トウのかわりに山のつるでも編めるのではないかと思い、早速、先生にお願いして、基礎編みを教えていただきました。その結果、予想以上の作品ができて上がりました。

このことがきっかけで会が活性化し、同時に森林整備も進んだことから、会の活動に対

する地域での理解が生まれました。最初は厄介者であったつるが宝物になったわけです。また、平成6年からは枝打ちや下刈りで切り捨てられる枝葉を活用し、草木染めを始めました。最初は試行錯誤の繰り返しでしたが、平成10年ごろからは、よい草木染めができるようになり、それと同時に会員もふえてきました。新しく会員になる方では、林家でない人には私たちの会が単なる趣味の会ではなく、林業を主体とした会であることを理解した上で入ってもらっています。

また、毎月、第2木曜を定例会として、会を3班に分け、各班それぞれ自主的な運営ができる体制にし、円滑な運営ができるように努めています。また、町の協力を得て、商工会事務所を一部改装し、私たちの活動拠点、草木染め工房「なないろ」を平成10年に整備しました。今では、工房でのつる細工や、草木染めの体験指導を通じた交流が全国に広がっています。平成17年の秋からは県内の農林業に携わる女性グループや、女性起業家と連携して、「やまぐち森の恵みネットワーク」を設立し、里と森からの贈り物と名づけたホームページで森林資源を活用した商品のインターネット販売にも取り組んでいます。将来的には、農林水の1次産業に携わる女性たちが連携したインターネット販売を目指しています。

ご清聴ありがとうございました。

○林座長 ありがとうございました。

それでは、同じく地域内で漁業者が観光業など異業種と一体となって活性化に取り組まれております、歯舞地区マリナビジョン協議会の竹内一義会長に、地域住民と各団体との合意形成、これは大変だったと思います。商品開発等についてお話いただければと思います。

どうぞよろしく申し上げます。

○竹内（歯舞地区マリナビジョン協議会） 私はただいまご紹介いただきました北海道根室市歯舞地区マリナビジョン協議会会長の竹内と申します。

このたび、平成19年度「立ち上がる農山漁村」選定候補としてお招きいただきましてまことにありがとうございます。

当地域のマリナビジョンの取り組みにつきましては、簡単に紹介させていただきます。北海道開発局が掲げた北海道マリナビジョン21構想というものを契機として、その現実に向け、地域住民はもとより、水産加工業、商工業、観光業、酪農家、農協、行政、関係者など、協議会委員に選任し、数度にわたる会議を重ねた結果、活発な提言やアイデアを得ることができました。さらに地域の将来を担う青年部員や女性部員に、地域ごとに集まっていたいただき、協議会役員がそこへ出向き、若者たちの将来の夢や希望を語ってもらいました。その場で「浜の晩酌セット」等のアイデアが発案されました。

異業種間の取りまとめ役として配慮した点については、漁業が中心の当地域において、漁協のみが前面に出るのではなく、地域の産業とどういった形での連携が可能なのか、各種、各層からの意見が出やすい環境づくりに努めました。また当地域においては、人口が

減少する中で、それぞれの分野を守ることが精いっぱい環境下であり、このままでは座して衰退する流れをいかに防止し、地域協働化の方向にもっていくのが最大の苦勞でありました。

この協議会においては、何ができるのか、何ができないのか、専門的な意見を聴取するために、4つの専門部会を設け、特にブランド化専門部会では資料にありますように、歯舞サンマ部会の「一本立ち歯舞さんま」は鮮度抜群と、札幌、東京、大阪、京都などのデパートの催事でも好評を博しております。そのほか、ウニ部会の塩水パック「はぼまい日の出うに」や、タラ釣り部会の厳冬期のマダラの活じめ「ふとっばら」などは、一部ですが、一流料亭などに納入され、高い評価を得ております。

また、地元酒造メーカーと水産加工場と協力し、「浜の晩酌セット」を限定1,000セットを販売中でありますし、歯舞の海で育ったスジメから熟出した高分子多糖体含有の「歯舞スジメフコイダン」を健康食品としてホームページ等で販売中であります。昨年、5月に実施した「日本一遅く咲く桜並木」の整備や9月に納沙布岬にて開催した「歯舞こんぶ祭り」などは、漁業とともに観光振興によって地域の活性化を図ると、まさに漁業関係者と観光業者、地域住民が一体となった取り組みでもあると自負しております。苦勞話というとなんですが、やはり人の意識を変えていくことが、地域活性化にとって最も重要なことであると改めて認識いたしました。

いずれにいたしましても、取り組み内容は決して背伸びせず、身の丈に合ったものだけを確実に実行するということを行っております。

以上、簡単でございますが終わりたいと思います。

○林座長 ありがとうございます。

それでは続きまして、直売所のネットワークづくりにより、地域の農業全体の活性化に貢献しておられます筑豊地域直売所連絡協議会の中原弘子会長に、連絡協議会設立のきっかけとそのねらい、それから連絡協議会の運営に当たっての課題等についてお話しいただければと思います。

どうぞ。

○中原（筑豊地域直売所連絡協議会） ちょっと前歯治療中なので、ものが言いにくくてごめんなさい。入れ歯もする暇がないぐらい忙しく働いていますと言ってこいと、皆から言われて出てきました。

筑豊というのは、非常にイメージの悪いところらしくて、少し以前までは、筑豊ナンバーの車は駐車させない駐車場もあつたり、住んでいる住民自体が私は筑豊ですと誇りを持って言えない状況もありました。しかし、私のような善良な市民が圧倒的多数住んでいるということ、まずはじめにわかってほしいと思います。

福岡の筑豊炭田の中心であります飯塚市に、飯塚農林事務所がありますから、事務局はそこになっておりますが、私自身は赤村というところに住んでいます。色のついた名前を持っているのは日本で1つしかありませんが私は、その直売所で頑張っております。この

筑豊地区から炭鉱の灯が消えた時、それに変わるものは農業しかない、どの市町村も考えました。幸い麻生知事も筑豊の農業振興には力を入れて下さって、活性資金を出してくださいました。農林事務所が非常に力を貸してくれました。行政の努力がなかったらできなかった組織だと思っています。私たちははじめに思いました。雨後の竹の子のようにどの町村にも直売所ができていく中で、どうやって自分のところが生き残れるかということ、一生懸命なのに、なんで商売仇が横に手をつなげるのかと疑問でいっぱいでした。

でもよく考えてみると、学校でも地域でも、自分の子どもだけが良い子でいられることは絶対にあり得ないことで、地域がよくなって、初めてその地域の子どもの立派に生長できるということであれば、直売所も横に手をつないでネットワークをつくり、共存共栄、みんなで一緒に伸びていこうと活動を続けて、6年目にやっとその意味がわかってきました。それも助成金のおかげです。

まず初めにやったのは直売所の自慢料理コンテストです。地産地消、地域の食材をつかって子供に食べさせたい料理を作り、夏休みに子供と父母に来てもらって、試食をしてもらいました。その中でいろいろなことが見えてきました。今の子どもがどんな嗜好を持っているのかもわかりました。そして圧倒的に子供は米が好きだということの再発見でした。お母さん方には、朝はパンでなく御飯と味噌汁、学校給食の米飯運動にも拍車をかけていきました。今の食育にも関係していることで、地域の直売所は、そういうことにも責任を持たなければいけないのではないのでしょうか。

もう一つは、消費者からの応募で地域の直売所の食材を使って料理コンテストを行っています。70名ぐらいの応募者の中から10名選んでコンテストを行い、レシピを作り上げて各直売所においてお客さんに配布し、売上の拡大をはかっています。6年目で助成金は切れましたが各直売所からの出資金を出してでも続けたい事業だということで、今年の行事も終わりました。いかに自分の直売所の野菜や食材を売り込むかというみんなの熱意が活動を支えてきたと思います。

筑豊地区は、炭鉱の灯は消えたけれどそこに生きた人達の心意気は今も消えずにつながっています。直売所は、高齢者と女性で栄えていると言っても過言ではありません。寝たきり老人が少ないとか、老人医療の持ち出しが少ないとかにも影響を与えていると思います。

地域の直売所はそれなりに頑張り栄えていますが、それはやはりネットワークの中で、自分のところでだけできない共通の問題を一つにまとまって勉強したり、売り方やイベントの持っていく方、販路を広げる問題等をしっかり学習した成果だと思っています。

地球の温暖化等で作物の変動は激しく、素人百姓では取り組めない困難さもありますが、行政がほんの少し手助けをして、ほんの少し励ましてくれれば、筑豊のじいちゃん、ばあちゃんはどんどん元気になっていく要素を持っているのです。

私たちはやがて後輩にこの道を譲っていくわけですが、今度は我々側からすると、もっと自主性を持っていろんな意見を出していかなければいけないと思います。農林事務所に

頼りっ放しの行動ではなく、自分たちの知恵と意見をもっと打ち込み、もっとよい組織にしていかななくてはと思います。

携帯電話を登録してもらって、今何がおいしいですよ、今何が売れていますよというような情報を発信するようなシステムをつくりあげるのも一つの方法だと思います。まちづくりは人づくりと言いますが、私たちは死ぬまで現役、平均年齢77歳が知恵を出し合っ

てこれからも頑張りたいと思っております。

私の村の、全国町村議連会の会長であります。名前が……

(「山本さん」という声あり)

○中原(筑豊地域直売所連絡協議会) 山本さんが福田総理はよく意見を聞いてくれる方だから、しっかりお願いしてきなさいと言いました。でも今日はテレビでは決して見ることのできない優しい笑顔が見れて、私はそれだけでも満足でした。

ありがとうございました。

○林座長 ありがとうございました。

それでは、最後になりますが、大学や商工会とネットワークも活用されながら、地域に古くから保存されていた農家の蔵ですね。これに着目して地域の活性化に取り組んでおられますNPO法人尾上蔵保存利活用促進会の佐藤正彦事務局長にお話しいただきたいと思

います。

○佐藤(NPO法人尾上蔵保存利活用促進会) 青森県の平川市から来ました佐藤です。

私どもの取り組み、設立動機等々について、3分で話すことは非常に時間がないわけですが、はしょってご説明をさせていただきたいと思っております。

農家蔵という地域資源の保存と、利活用促進をモチベーションに、町内外賛同者26名で平成14年1月に尾上町蔵保存利活用促進会を設立しまして、翌15年の8月にNPO法人の認証を受け、法人組織として活動し、今日に至っております。

この地域資源の活用が、グリーン・ツーリズム事業の展開する上で、非常に大事な要素だというふうな考え方に立ちまして、設立以来、蔵保存利活用促進とグリーン・ツーリズム事業の推進基盤の確立と、事業の定着・拡充を指標にしながら、活動を展開してきました。私は地元農協に36年間勤めて、地域農業にかかわり、農産物の価格低迷で再生産価格すら維持できない状況下の農家経済の実態を見てきました。

農家は借金の増大、そして農業意欲の減退、放棄農地の増大と、このような状況の中、元気のない農村において、グリーン・ツーリズム事業で新たな農業所得の確保対策と、そして地域農業の維持・発展を図るためには、なんといってもグリーン・ツーリズム事業を定着・拡充させるしかないという確信のもと、農協職員をやめて自分のライフワークとしてこの活動に専念している者であります。

私どもの組織の特徴は、弘前大学等々のいわゆる教育機関との連携、いろいろな団体との連携というものが私どもの組織の特徴であろうと思っております。もともと、農協職員

時代から培ってきた人と人との交流、人脈等々が、組織構築、活動をする上で非常に大きな推進力となってきたとご感想を申し上げます。そういう点を踏まえて、組織連携、組織構築ということも、すべては人と人との交流、信頼が連携の基本であることを、今しみじみ感じて申し上げます。そしてまた何事も一人から始まるんだということも思っております。同じ問題意識を持った仲間をつくり、仲間ができたなら組織をつくり、組織ができたならネットワークをつくって連携していくということがいかに大事かということも、今、自分でいろいろかかわりを持って、実感しているわけでありまして。

そして私どもの活動が、短期間に大きな成果を残せた要因は、何といたっても農家蔵というどこにもないこの地域資源、素材のよさ、そして弘前大学、八戸工業大学、地元の柏木農業高校など、こういう教育機関との連携、県内外のNPO法人、グリーン・ツーリズム推進団体、町商工会、旅行会社などの連携、何といたっても会員の連帯が事業を展開する上で大きな推進力となっているということでもあります。

更には、「立ち上がる農山漁村」の選定など各賞の受賞がメディアに大きく取り上げられたことによるPR、活動の評価等々がパブリシティとなって、この県内外からの視察の受け入れや講演依頼、そしてセカンドスクールの受け入れや、ファームステイの受け入れ増加など、グリーン・ツーリズム事業の定着・拡充に繋がっているわけでありまして。それに伴っての受け入れ農家の所得向上、地域農業の振興、今まで連携できなかった商工会と同会青年部との連携等々が、この地域全体の活気に繋がり、明るい兆しが見えている状況でありますけれども、私どもはまだまだこの組織を立ち上げて活動する日も浅く、発展途上で課題も山積しております。しかしながら、都市と農村共生・対流構築というこの構築、そして地域農業振興、地域活性化に確かな手ごたえを感じて活動を展開しているところでもあります。

以上です。ありがとうございました。

○林座長 ありがとうございました。

6人の方々から事例を発表いただきましたが、3分ではなくて平均5分以上お話になられた。途中でとめるチャンスがないくらいとうとうとお話しいただきまして、本当にどうもありがとうございました。

これについて委員の方々からの感想等をいただきたいんですが、3分ではなくて、2分ではお願いできないでしょうか。どなたからでも結構ですのでどうぞ。

今村委員から。

○今村委員 羽咋市の高野さん、さっき名刺交換をさせていただいて、この人、資料を持って何者かなと思ったんです。テレビをやっていたんです。物すごくテレビ的な手法で、驚きだとか納得感みたいなものを、ある意味、ずるく、うまくやっているなど、すごく見本になると思うんですね。このブランドの作り方とか、あと大衆心理の読み方、もう大したものだと思います。ここに結構、地域振興のかぎがあって、その作物の品質というのはいくらもよくなければいけない。

○林座長 それは前提ですね。

○今村委員 うん。これは大前提としても、それをどういうふうにやって付加価値をつけていくか。ローマ法王なんて、完全に、テレビだと仕込みですからね。それをきちっと Son of Godでできるということ、もう感服しましたね。これはもう一つのすごく地域振興の事例になっています。

○林座長 ありがとうございます。

いかがでしょうか。

永島委員。

○永島委員 僕はきょう、NHKの「たべもの一直線」という農業の番組をやっているんですけども、きょうは「ふるさと通信員」という方、NHKと契約してふるさとのいろいろな農業の事業とか、ジシンやなんかの通信もする方たちがいるんですね。その方とも話していて、この間、「立ち上がる農山漁村」で板橋の大山商店街の事例やなんかもお話し聞いたんですけども、この間、9日に僕の青空市場をまた有楽町で開きまして、その中で生産者の方たちのお話を聞くと、それとかふるさと通信員のお話を聞くと、ネットワークが足りないというんですよ。自分たちの持っている情報はいっぱいあるんですけども、それが東京とか県の中央には伝わっていくけれども、横のつながりが無い。今、僕の知り合いの秋田の十文字の直売所と、奄美大島の直売所をつなげて、冬にないかんきつ類を今、秋田に送っているんですね。秋田のお米を奄美大島に送っているんです。このつながりやなんかができると、非常に日本の中で東京中心ではなく、地方のネットワークというものが、これからとても地方同士のネットワークというのはとても必要になってくるんじゃないかなと。それがすごく生産者、それと地方の行政の方たちのお話というのが非常に多く聞かれました。

○林座長 ありがとうございます。

マクドナルド委員。

○マクドナルド委員 似たような感想なんですけれども、やっぱりこういう農村とか都市住民とか、山村とか漁村とか都市住民のネットワークづくりは今までかなり積極的にやってきましたので、とてもいいことだと思うんですけども、しかしやっぱり1次産業同士のネットワークづくりが非常に欠けているような気がしていて、これが非常に問題だなと思って、縦割り行政とよく言われるんですけども、縦割り社会、行政だけではないんですね。そうすると、やっぱりしっかりとした第1次産業づくりをしていくのには、今は都市住民との交流もいいんですけども、それはもうアワノイであっていいと思うんですけども、実際の現場づくりはやっぱり山村、農村、漁村と一緒にやっていく。

山口県とか、福岡県とかあたりしていて、私は農村、漁村、フィールドワーク、あちこち回っていて、海岸沿いは北海道から沖縄まで8割回っていて、今晚は沖縄で残りのものやっつけていくんですけども、やっぱりああいうフィールドワーク回っていて、漁村へ入っていくと、みんな割りと海の次はどこにあるのか言ってくれるんですけども、内陸

に入っていくと、隣は何があるのか、もうさっぱりわからないところが余りにも多くて、という孤立した状態で、今、第1次産業が全国的に落ちているというような気がしていて、やっぱりこういうネットワークづくりはジョセイがしっかりしているようなところで、今後もっともっとやっていくことは大事だと思うんですね。そういう意味では、霞ヶ関で農林水産省、1階から8階までもうちょっとそういうネットワークづくりをもう大いに、もちろんしっかりやっているんですけども、もっともっとやっていくことによって、いいなと思うんですね。

ちょっと追加していくのが、ちょっと今回はそういう事例は出てきていないんですけども、バイオマスとか、環境保全型農業とか漁業とか林業とか、そういうのをまた来年、ことしもすごいすばらしい事例もあるし、来年またいろいろピックアップしていくと思いますので、とてもすばらしい活動を皆さんやっていて感動的ですね。

長々とすみません。

○林座長 ありがとうございます。

田中委員どうぞ。

○田中委員 皆さん、アイデアと努力ですばらしい商品を、生み出されて、手にとるだけでも興味がわく、ちょっと買いたくなるなという商品でした。

このような商品が生まれる背景には、自分たちの地元の生活をもっと便利にしようとか、地元の素材を何とか生かせないかという、困っている点に気づき、それを解決するということがあったと思います。その商品自体はもとより、その商品が生み出された背景や理由が、多くの方にさらに共有されるといいのかなと感じました。

ブランド、PRを専門としている立場から、ブランドというのはいろいろなことが言われますけれども、簡単にいうと、売れ続ける仕組みをつくっていくということが一番大事なことで、売れるためにはやっぱりお客さんが大事ですよ。何万人、何百万人買ってもらわなくても、顔の見える、良いお客様に買い続けていただければいいわけで、先ほども携帯やネットで販売する新しい手法のご紹介がありましたが、買っていただいたときに、それを分析して、どんな方に売れるのかということ把握して、そこの方としっかりコミュニケーションをとっていくことが継続の第一歩です。PRで一時的なブームはつくれますけれども、永遠に買い続けてもらうという流れは、やっぱりこういうきっかけをいただいて、みずから努力をして、またふやしていくということが大切かなというふうに思っています。

あとは皆さん、成功していらっしゃる場所は、同時進行で全方位的にいろいろな施策をとっているという共通点があります。私どもは商品を買うとき、理性ではなくて、情緒で買うんです。好きだな、ほしいなど。そこには情報が大切で、そのためにはいろいろなステークホルダーに向けて、いろいろな企画を同時進行で投げかけておくと、そこが活性化しますので、その中で応援団がどんどんふえていって、応援団がふえるとやっている方も非常にやる気が出て、また継続するといういい流れができると思います。そこで初めて

総理が最初におっしゃった面的な展開ということにつながると感じますし、「立ち上がる農山漁村」に認定し、表彰する制度であるこちらの企画はそういう点がポイントで、またさらなる発展ができるかなと期待のできるどころです。

○林座長 ありがとうございます。

小泉委員どうぞ。

○小泉委員 東京農大の小泉です。選定をされていて、今回は全部すばらしいものだと思うんだけど、選定をされていて非常に感ずるのは、明日につながる農村・漁村のそういう力を引き出そうと思って見ている、若い人たちのこの活躍なり応募というものが、ほとんど出てこないんですね。これはやっぱりもっと若い人たちを育てていくようなそういうようなものがやっぱり必要であるということが一つと、それから今一つは、さっきもちろっとここで話ししていたんですけれども、私、実際に選定しても、非常に悩むんですね。もうほとんどこれはいいなと思っても、こうだああだということで、もれてしまっているところがある。だけれども、そのもれたところに、選定されなかったところに、どういうふうなフォローをしているのか。もう結局、それが、あそこは選ばれたけれども、うちはだめだということになると、なんかこう選ばれなかった方々、とっても残念だけれども、すばらしい事例をしているわけですね。だからやっぱりそういうものをこれからやっぱり応募してくれて、選定されてきたところには、フォローして力をつけてあげるという何らかの策があっていいのかなという感じがしました。

○林座長 ありがとうございます。

三國委員いかがですか。

○三國委員 私、3代、小泉総理と安倍総理と福田総理、この会で私もミーハーで3人の総理を見させていただいて。私も、食の安全安心とか、食育とか、地産地消とか、ずっともう10年以上活動しているんですけども、総理もきょう聞いていかれて、本当に皆様、小泉総理とやっていたときは、発表者がみんな下手くそでほとんど上がってしゃべれなかったのが、もうすばらしい、これだけやはり3期続いていてこれだけ結果が出て、非常にまんざらではないというか、いろいろな問題ありますけれども、日本もまだ捨てたものじゃないといえますか。

やはり、我々ができることはほめてあげることとか、すばらしいねと、そしてさっきおっしゃったように、何か、小泉総理のときは何か差上げたんですね、証書を。

○林座長 今でも差上げています。

○三國委員 そうですね。そういうものがなんかすごく非常に励みになって、ぜひ福田総理もそういうことをやっていただければ。

○林座長 ぜひ視察に行ってくださいますよ。ありがとうございます。

では白石委員。

○白石委員 きょうはすばらしい事例発表をありがとうございました。

毎年、女性の方たちのグループのご応募が何件かあって、見るたびにその内容も豊かに

高度化されているのに驚かされます。特に、女性の人たちというのは、地域を何とかしようという熱い思いはあるものの、最初からもうけようとか、活性化しようというような大きな目標を立てていらっしやなくて、地元にある身近なものに注目をして、私たちがこれがほしいから、こういうものをほかの人もほしいに違いないよねとか、子どもたちを何とかしなければという、ほんの身近な思いからスタートしていらっしやる。それが結果として功を奏しているような例が多いなというふうに感じております。

今回も本当にすばらしい発表をありがとうございました。以上でございます。

○林座長 ありがとうございます。

総理、今、委員の方々のお話もありましたけれども、何かご感想ありますでしょうか。

○福田総理大臣 拝聴させていただきまして、今日遠くの方から来られたかいはあったと思いますよ。私どもはよかった、そう思っています。

たくましいですよ、皆さん。たくましくやっておられるんですよ。やっぱり人材と創意工夫と、こんなふうに申しますけれども、そういうことが基本だなというような感じがいたします。若い人が参加してくれればいいと、それはもう私もそう思いますけれども、それは教育の問題もあるから小泉先生にお願いをしなければいかんことだというように思います。

しかし、そういう若い人たちが目を輝かせるような地方になってほしいというのが、私なんかの願いでございまして、そういうお手伝いをどういう形でしたらいいのかななんて、日ごろ考えて、増田地方再生担当大臣とか、それから若林農水大臣、皆さん悩んでおるところでございすけれども、きょうのお話なんかも大いに参考になります。そういうようなお知恵と、そしてまた皆様方のその努力している様子、これが大事なんだろうと思いたすけれども、そういうふうなことを学びながら工夫をしてまいりたい。政府もいろいろなことを考えてやっていますけれども、当たるときもあるし外れるときもあるということでありまして、しかしさっき中原さんが、ちょっとした行政の手伝いがあると、これはもう本当にいいんだとこういう話があったけれども、それで増田大臣もほっとしたような顔していましたけれども、そういうこともあります。だから、ほんの気持ち程度のことで、それがものすごい有効になるようなそういううまい方法をこれから工夫していかなければいけないなど、こういうふうに思っています。

日本の社会もこれからどんどん変わっていくんですよ。今、転換期だと思います。本当に変わっていく。あと10年後、20年後したら、すっかり様変わりということもあり得るわけで、そういう時代に一体どうなるのかなというのは、今からそれに備えなければいけない。その備えを今一生懸命やっているというそういう段階でございまして、皆様方の活躍があつて、きっとまた皆様方のそういうアイデア、そういうものがあつて、10年、20年後があるんだろうと思いますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

特に、地域の発展というのは、人口減少時代で急速に人口が減っていくと、そういう地域というのは多いわけでございますので、そういうような地域、人口が減少する地域を放

置っていていいか、そのことも私ども大変悩んでおりますけれども、皆様方の地域においても、我々と同じ悩みだというふうに思って、またいろいろな知恵を、あるいは意見等ございましたらどうぞ遠慮なく言っていただきたいと思います。

ローマ法王までは思いつかなかった（笑）。どうもありがとうございました。

○林座長 ありがとうございます。

○若林農林水産大臣 農林水産大臣を務めております。福田総理の方からは、農林漁業を基盤としているこの農山漁村が元気になるということが、日本が持続的に元気を出し続けて発展していく原点みたいなものだから、そういう角度でしっかりやってもらいたいというお話を受けております。

昨年11月に農林水産省では、農山漁村活性化のための戦略というものを検討した結果、戦略を立ち上げておまして、やはり今、いろいろなお話がありました中で、地域の人たちがしっかりやる気を起こしていくためには、リーダーが大きな役割を果たすというような視点を取り上げております。

きょうのお話をお聞きしながら、もう本当に共通している部分が幾つもあるんですね。やはり1.5次産業というようなお話もいただきましたけれども、やっぱり地域のこの資源というようなものを再評価した上で、アイデアを加えてそういう付加価値をつけるということ、そしてその付加価値を周囲に認めてもらうような努力をし、アイデアを出していくということ。それからやはりそういう地域資源を再評価していくことによって、それぞれ地域が自信を持つと。自分の地域の資源というものについて、再評価して自信を持っているというようなことを感じました。そしてやはり地域の連帯というか、地域の皆さん方のこの参加型、その広がりはいろいろありますけれども、参加型の中でやはり持続的にこういうアイデアが生かされ、そして地域の活力につながっているんだと、そういうふうな思いをしたところでございました。

本当に、それぞれの委員の皆さんからも貴重なコメントをいただいて、参考になりました。どうもありがとうございます。

○林座長 ありがとうございます。

増田大臣には最後にコメントいただきたいと思います。といいますのは、ひとつビジネスを終わってしまわなければいけないわけでありまして、平成19年度の「立ち上がる農山漁村」これは2つありまして、1つは選定、この「立ち上がる農山漁村」そのものの選定と、もう一つは新たな力、つまりこれを支援してくださる企業、あるいは大学等、この2つの選定事例の案は、資料5にございます。すべてすばらしい事例ばかりですので、できましたら平成19年度の「立ち上がる農山漁村」の選定事例として、この方たちを選びたいというふうに思いますが、委員の皆様いかがでしょうか。

（「異議なし」という声あり）

○林座長 よろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは、資料3の59事例、これが「立ち上がる農山漁村」として、また「立ち上が

る農山漁村～新たな力」、つまり企業とか応援する応援団のほうですね。これは資料5にございます。ことしはこの3団体になりますけれども、これを本日の有識者会議において選定いたしました。

なお、本日選定した事例や、団体の代表者には、追って選定証の授賞式を開催いたします。選定証を交付する予定ですので、委員の皆様には詳細が決まりましたらお伝えいたします。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、先ほど総理から、また若林大臣からコメントをいただきましたが、増田地方再生担当大臣からお願いいたします。

○増田地方再生担当大臣 どうも今日はありがとうございました。

先ほど、お話を委員の先生方からお聞きして、永島さんとマクドナルドさんのほうから、地方と地方とのつながりというか、連携の話、おっしゃっておられましたですね。都市と地方の共生とか、都市と地方というのは当然のことなんですが、一時期、例えばどぶろくをつくっているところ同士でどぶろくサミットをやったりとか、随分盛んに地方同士でサミットをやったり、随分つながりを目立つ形で発信しようという試みがあったんですよ。私、多分、相対的には横同士のつながりも今深まっているのではないかと思うんですが、どぶろくサミットはまだ続いておりますけれども、ちょっと地方のそういうサミットなども最近もう中止になったり、元気がなくなっているのは事実。これはもちろんそういったものについての財政的な余裕がなくなったり、それから少し継続してややマンネリ化したので、ちょっとここで一度休んでみようかといったようなこともあるので、お話しございましたとおり、その横同士のつながりをどれだけ深めていけるかどうか、これから私どももよく考えていきたいなど、今のお話を聞きまして。総体としては多分、いろいろな意味でお互い同士の情報交換とか連携を深めているのではないかと思うんですが、もっと元気だということをアピールするそのやり方が何か必要ではないかなと。そうすると、地方の特色もいろいろ見えてくるので、先ほど、三國さんのほうから、やっぱりほめていくというか、その場づくりがすごく大事だというお話しございましたので、そこは大きなヒントをいただいたなと思いました。少しまたお時間いただいて、考えてみたいと思います。

○林座長 ありがとうございました。

それでは、今日の大体の予定を終わりましたが、今、福田総理大臣からもう一つのいき方、つまり地方に対して移住・交流するこのプログラム、資料にいただきましたが、残念ながら先ほど総理がおっしゃいましたように、2030年には人口が10%減るといふ、人口問題研究所がそういう予測を立てています。できたらそういう予測を裏切るような流れをつくれないうか。例えば沖縄では5%人口がふえるんですね。一番減るところは秋田県で、その予想によれば25%減りますから、つまり4人に1人がいなくなってしまうという、その県から。そういう中で、人材をどうやってつくっていくか。

きょうの6名の方というのは、もう本当にこういう方ばかりが地方におられたら、おそらく地方は何ら問題ないんですけれども、こういう方ばかりではないというところで、先

ほど総理もおっしゃいましたけれども、若い方も含めて、どのような人材づくりをこれからしていくのか、また都会から地方をどうやって応援できるか。一番いいのは、移住していただくことではありますが、そういうプログラムを今後どういうふうに私たちのこの「立ち上がる農山漁村」でも取り上げたいと思います。

○福田総理大臣 1分でいいです。

○林座長 お願いいたします。どうぞ。

○福田総理大臣 いや、たまたまさっき慶應の島田晴雄先生から教えてもらったんですけども、あの人を中心になってやっているんですけども、国内移住ですよ。今、そういう人が多いらしいです。各地区に都会から行くんですよ。これは若い人ではないんですけども、年寄りというか、定年後なんですけれども。それでそういうお世話するようなどころがあれば、結構最近、地方に移住してくれるらしいんですよ。各地方で割合、家も安いでしょ。そういうものを提供するとか、そういうふうなことなんですけれども、これを移住・交流推進機構という事務所をつくって、進めているらしいんですけども、そういうものを受け入れるということもいいんじゃないか。

これは二、三十年前はそういう流行が一時ありました。都会から地方に住んで、そしてそこから通勤するとかいったようなこともありまして、バブルがつぶれて、みんなやめてしまったんです。だけれども、またそういうふうな雰囲気になってきているということなので、これは僕は進めていいと思うんですね。地方のためにね。

○林座長 ありがとうございます。さっき田中委員がおっしゃったように、これをブランド化して、永久運動にすることができたらいいですね、一時的な流行ではなく。

○福田総理大臣 きちんと宣伝してください。

○林座長 本当に、どうも総理ありがとうございました。

予定の時間になりましたので、本日の有識者会議はこれで終わらせていただきたいと思います。

本当にどうもありがとうございました。